

2024/10/29

# Crocodilus lunam comedere

## Episode-01 「選択」

Copyrighted material.  
Do not reproduce.  
Thank you for appreciate!



さかなのがにが様

しおう きよみ

# 「Crocodilus Lunam comedere episode-01」・登場人物表

イワン・ビアンキスキー (38)	(18)	Crocodilus Lunam comedere オーナーシェフ
ルーナ・ヌオーヴァ (12)		Crocodilus Lunam comedere 給仕見習い
安房 <sup>あわ</sup> 環 <sup>たまき</sup> (28)		お客様
子ヤギ (10)		イワンの「大事な人」
グッズ制作担当 (32)		安房の仕事相手
悪魔 (10)		「子ヤギ」に悪魔の羽と尾を生やした姿をしている

マルチクリエイターとして幅広い分野で活躍していた環は、ある日、月を飲み込むワニが描かれたチケットを手に、見たことのないトラットリアに迷い込んだ。トラットリア Crocodilus Lunam comedere では、訪れたお客様の「手放したいもの」を消失させてくれるという。

興味のあることすべてに手を出しては人並み以上にこなしてきた環は、周囲からの称賛と裏腹に、自身の才能の幅に倦んでいた。「普通になりたい」と願う環に、イワンは彼の言う「普通」の定義を問いかける。

選択肢もやることも多すぎることに疲れ果てていた環は、多岐にわたりすぎる才能の数を減らし、一分野にのみ特化した「一般的なクリエイター」になりたいと答えた。イワンはさらに「ではどの分野の才能を残したいのか」と問うが、環はそれに答えることができない。

提供された料理を食べながら、あれもこれもと手を出して楽しくて仕方がなかった頃のことを思い出す環。疲れているのなら仕事を調整して適度に休むことに加え、楽しいと思うことを優先してみてもどうかと背を押されて、環は自分の才能の幅とうまく付き合っていく覚悟を決め、店を後にした。

1. Crocodilus lunam comedere 外観 (昼)

薄曇りの街並み、レンガ壁面から突き出した旗看板。一步奥まったところに、重厚な木製の扉がある。

扉にかかった、月を食べるワニが描かれた額入りの看板と、手元のチケットをまじまじ見比べる安房 環 (28)

安房

「ワ」が……Crocodilus lunam comedere」

安房、ドアノブを握り、ひとつ深呼吸をして、店内に入る。

2. Crocodilus lunam comedere 店内 (昼)

ドアベルが鳴る。

来客に気付いたイワン・ビアンキスキー (38)、ルーナ・ヌオーヴァ (12)、パツと扉のほうへ顔を向ける。

「いらっしやいませー！」

「チウ」ぞ、Crocodilus lunam comedere ぐ。  
(胸に手を当てお辞儀) チケットは、お持ちでしょうか?」

安房、イワンの身長とワニの尾に目を見開き、へらりと笑う。手に持っていたチケットを見せる。

「いつの間にか、チケットを持ってこの店の前に来ていました」

安房

イワン

「ええ、お待ちしております」

ルーナ  
「お客様はみんな、そうやってここに来るの  
(声を弾ませて)」

ルーナ、安房のカバンを受け取り、足早にク  
ロークへ持っていく。

安房、ルーナが向かう先を見た流れで店内を  
見渡す。安房のほかに来客はない。

イワン  
「お席へご案内します」

安房、イワンに続いて店内を歩く。静かに引  
かれた椅子に腰かけ、わずかに肩の力を抜  
く。

安房  
「正直……あまり、お腹はすいていないん  
ですが」

イワン  
「そうかい？ (安房をじっと見て) しばら  
く食べていないように見えるケド……」

安房  
「え (少しこけた自分の頬に触れる)」

イワン  
「お客様が食べたくなるような料理を作るの  
が、オレの仕事だよ。もちろん、無理にとは  
言わないけどね」

ルーナ、ふたりが話している間に厨房へ行  
き、戻ってくる。氷の入ったグラスと、薄く  
スライスされたりんごが入ったピッチャーを  
トレーにのせて、安房の席までゆっくり歩  
く。

ルーナ  
「イワンくんのごはん、おいしいんだよ」

安房  
「イワンくん？」

イワン 「おっと、申し遅れました。イワン・ビアン  
キスキー……この店の、オーナーシェフだ  
よ。よろしく」

ルーナ、コースターとおしぼりを安房の前に  
置く。ピッチャーからグラスへ水を注ぎ、コ  
ースターへ乗せる。

ルーナ 「あたしはルーナ。イワンくんのお手伝いしてる  
の！ お兄さんは？」

安房 「僕は、安房<sup>あわ</sup>。安房環<sup>あわたまき</sup>」

ルーナ 「やっぱり！（目を輝かせて）ご本にお写真がつ  
いてたから、もしかしてっと思ってたの」

安房、息を詰まらせて表情を硬くする。

イワン 「（小声で）ルーナ。……失礼しました」  
ルーナ、身体の前で両手を組んで身を小さくす  
る。

「ごめんなさい……」

安房 「い、いえ。（少し口ごもって）……僕のこと、  
知っててくれて、嬉しいよ」

イワン、安房の様子を観察して口元に手を添え  
る。

「ふむ……」

安房、イワンを見上げて首を傾げる。

「……なにか、悩みがあるのかい」

「……」

安房、口ごもってうつむく。

安房 「（深呼吸をして）……お話しても、いいんでし  
ょうか」

---

イワン 「話してみるだけでも、楽になることはあるさ」

イワン、軽く肩をすくめる。

ルーナ、心配そうに安房の顔をじっと見る。

ルーナ 「あのね、苦しくてどうしようもないこと、イワンくんにお話ししてみようお客様、いっぱいいるの。だから、（一呼吸おいて）もし、なにか、困ってるなら。イワンくん、きっと一緒に考えてくれるよ。ね？」

ルーナ、イワンを見上げる。

イワン 「ああ。……ここは、そうやって悩みを抱えた人がよく来るんだ」

イワン、うなずいて静かに安房の向かいの席に腰かける。

ルーナ、トレーを持ってそっと厨房へ戻る。

イワン 「……オレは、見ての通りワニなんだけど」

イワン、伏し目がちに話します。

安房、ためらいがちに黙ってうなずく。

イワン 「なんでも、食べちゃうんだ」

安房 「なんでも？」

イワン 「そう。……手に取って見ることができる、モノだけじゃない。記憶や、気持ちなんかも」

安房、目を見開く。

イワン 「食べたものは、なくなる。……なかったことになる、というのが、近いのかもしれない」

安房 「なかった、ことに……」

イワン 「そう。だから、……悩みのもとを、食べてしまつたら。（声を低めて）そんな悩みがあったこと自体、忘れてしまう」

イワン、ゆつくりと安房と目を合わせる。

イワン  
「『こんなもの、なければ』と。思うようなものが、キミには、あるかい？」

安房、右手で胸を押さえ、服をつかむように指に力を入れる。

安房  
「(かすれ声で) さい、のう……」

イワン、黙って先を促す。

安房  
「才能を、食べてもらうことは、できますか」

イワン、うなずく。

イワン  
「できるかできないか、例えば、できるよ。…  
…どうして、それを？」

安房  
「自分で言うのも、おかしな話ですけど」

安房、テーブルの上で両手を組む。指先が手の甲に食い込み、おずおずと力を緩めてから、堰を切ったように話し始める。

3. (回想はじめ)・安房自室(昼)

安房 M  
「……才能に、恵まれすぎているんです。最初は、絵でした」

自室にて、ペンを持って液晶タブレットに向かう安房の後ろ姿。

4. 同・書店サイン会ブース(昼)

安房 M  
「世界観を、ストーリーを表現するのに、絵では足らなくなつて文を書くようになって」  
書店で自著のサイン会をしている安房。

5. 同・会議室（昼）

安房 M

「キャラクターの身に着けているものを現実存  
在させたい、と思ったから、ハンドメイドや服飾  
のデザインにも手を出して」

アクセサリーデザインの図案と、出来上がった現  
物を見比べて、グッズ制作担当と話し合う安房。

6. 同・収録ブース（夜）

安房 M

「著者近影やインタビューなんかで顔が売れて、  
テレビに出たと思ったら、俳優の仕事や、声優の  
仕事も来るようになって」

マイクの前で台本を持ってセリフを読む安房。

7. (回想終わり) Crocodilus lunam comedere 店内（昼）

安房

安房、組んだ自分の手を睨むようにうつむいて、  
ひとつ大きく息をつく。

「……どれも、上手くいってしまっんです。何を  
しても人並み以上に。いつそ気持ち悪いほど。そ  
れでも、時間は有限で、全部を同時にはできなく  
て……最近、どこへ行っても『よそ見ばかりし  
ている』と言われて」

安房、フツと体の力を抜いて背中を丸める。

「疲れて、しまったんです。普通になりたい…  
…」

イワン、顎に手を当てて考える仕草を見せる。

「（つぶやくように）キミの言う、普通、は……  
どういう状態を指すんだい」

イワン

安房

安房、やや視線を持ち上げてイワンを見る。

安房

「ふつう……普通の、クリエイターって、大抵は……（言葉を選ぶように視線を泳がせる）どれか一つに特化、しているものじゃないですか」

イワン、わずかに首を傾げる。表情に変化はない。

安房

「絵描きなら、絵だけ。舞台上で演技ができて、声だけの演技が上手いとは限らない。そんなふう……僕も、どれかだけだったら、こんなに苦しいことは……」

イワン

「ナルホド。……それは、本当にキミの考えかい？」

安房、パッと顔を上げる。

安房

「……僕のか？」

イワン

「他の誰がそうでも、（顎に手を当てたまま、フツと顔を横に向ける）キミにそれが当てはまるとは限らないだろう。それに（目線だけ安房に向けて）……キミは、クリエイターでありたいんだろう？」

安房

「え、ええ……」

イワン、安房に正対して問う。

イワン

「じゃあ、もうひとつ。残すなら、どの才能を残すのか」

安房、目に見えて視線が揺れる。わずかに荒くなつた呼吸に、震えた声に乗る。

安房

「どれか、……選ぶ……」

イワン

「そう。（念を押すように）……食べたものは、二度と、元には戻らないから」

イワン、目を伏せ自分の喉から胸元までを手でなぞる。  
安房、イワンの様子を見て、うつむきがちにテーブルに預けていた腕を引く。

8.

(回想はじめ) 白い部屋

イワン M

「昔、大事なひとを飲み込んでしまったって」

子ヤギ (10)、膝をついたイワン (18) に縋りついている。イワン、払いのけることも抱きしめることもできないまま、冷や汗を流して息を荒らげている。

暗転。

イワン M

「……自ら腹を裂いたが、なにも……出てこなかった」

イワン、血だまりに膝をついている。裂いた腹の中は空っぽで、本人も腕をだらりと垂らして虚ろな顔をしている。

9.

(回想終わり) Crocodilus lunam comedere 店内 (昼)

イワン

「……飲み込んでしまったものは、どこに行くのかわからないんだ。取り戻すことも……(ぐっ、と一度口を結んで) キミは本当に、その才能を、手放してしまっただかい？」

イワン、胸元に置いていた手で一度腹をさすり、安房をまっすぐに見つめる。

安房、口元を覆って深呼吸を繰り返す。

安房

「……僕、は」

イワン、ゆっくりと立ち上がる。

イワン

「大事な考え事は、美味しい飯の後にするのがいい。……少々、お待ちください」

イワン、厨房へ歩いていく。

ルーナ、すれ違いで厨房から出てきて、イワンの背を見ていた安房の向かいに腰かける。

ルーナ

「お顔が青いわ。大丈夫？ お水、飲んだらすつきりするかも」

安房

「……ああ、ありがとう」

安房、いくつか瞬きをしてからおしぼりで手を拭い、氷の溶けたグラスに手を伸ばす。水を口に含んで、表情を和らげる。

安房

「りんごの香りだ」

ルーナ

「りんご、好き？」

安房

「うん」

ルーナ、小さく足をばたつかせてにんまりと笑ってから、安房をじつと見る。

ルーナ

「……あたし、ご本の表紙も中身とおんなじ人がかいたんだって気が付いたとき、すごくいいなって思ったの」

※※※

(フラッシュユ)

本を読んでいるルーナ。

ふと本を閉じ、イラスト調の本の表紙を撫でる。

指先の位置には『著・イラストー安房 環』と記されている。

※※※

ルーナ

「片方だけじゃなくて、どっちも大好き」

安房、口を結んで目を伏せる。

ルーナ、続けて口を開きかけるが、眉を下げて笑う。

ルーナ

「きっと、大丈夫になるよ」

ルーナ、エプロンを翻して厨房へ戻っていく。

安房

「……そう、かな……」

安房、自分のズボンの生地を握りしめる。

イワン、ルーナとすれ違いでトレーを持ってホールに戻ってくる。

イワン

「……少し、落ち着いたかい」

安房、はっと顔を上げる。

安房

「ええ……ルーナちゃん、いい子ですね」

イワン、ふっと顔を和らげてから皿を安房の前に置く。一呼吸おいて、澄ました顔で話し始める。

イワン

「お待たせしました。まずは前菜のご紹介を。……トマトのフアルチアです。中身をくりぬいたマトに、茹で卵と酢漬けのアーティチョークを和えて詰めました。アップルビネガーとオレガノの香りをお楽しみください」

安房、イワンに黙礼してカトラリーを手取る。皿の中心で輝くつややかなトマトの中には、マヨネーズと酢で和えられた具に乾燥オレガノがぱらりとちりばめられている。ナイフでトマトを切り分けると、中にはしっかりと具が詰まっている。安房、カップになっていたトマトと一緒に、フォークで口に運ぶ。

安房

「……!」

安房、ゆっくりと咀嚼することに目を輝かせる。

イワン、それを見てわずかに口角を上げる。

イワン

「お口に合いましたか」

安房、小さく喉を鳴らして飲み込み、イワンを見上げる。

「トマトが、甘くて。驚きました、酸味が強そうだと思ったけど、さっぱりしているのにまろやかで、優しい……食欲がなかったはずなのに、これは……」

「言っただろう？ 食べたくなるような料理を作るのが、オレの仕事だって」

イワン、ゆら、と尻尾を揺らす。次の一口を口に運ぶ安房を見て、満足げに目を緩める。

「次のお皿をお持ちするまで、ごゆっくりお楽しみください」

イワン、一礼するとゆっくりと歩いて厨房へ戻る。

安房、一口ごとにファルチアを切り分けては口に運び、味わって食べる。

「……ちゃんと、味がわかるような食べ方をしたの、いつ以来だ……？」

安房、惜しむように最後の一口を口に入れる。鼻に抜ける香りさえ味わうように息をついて、空になった皿を前に目を細める。

ルーナ、厨房から出てくる。

「お済みのお皿、失礼します」

ルーナ、すました顔だが、安房の顔を見てにっこりと笑う。

安房、ルーナと目が合うと相好を崩して頬を掻く。

安房 「……たしかに、とてもおいしいね」

ルーナ 「でしょ!?!」

イワン  
「気が早いんじゃないのかい？ メインはこれからだよ」

イワン、トレーに深さのある皿を載せて厨房から出てくる。空の皿を持ったルーナとすれ違って、安房の前に湯気の立つスープ皿を置く。皿の中身は緑が主体になっている。

イワン  
「スピラーレと、グアンチャーレのミネストローネです」

安房、意外そうな顔で皿とイワンの顔を見る。  
イワン、あいまいに笑って小さくうなづく。

イワン  
「ミネストラは野菜や穀物、豆類などの煮込みを意味します。ミネストローネ、になると『盛りだくさんの』……必ずしもトマトのスープではないのですが、このミネストローネにもトマトは入っていますよ」

皿には、見えるだけでもホウレンソウ、キャベツ、ニンジン、ジャガイモ、セロリ、ヒヨコ豆など様々な野菜と薄切りのグアンチャーレがよく煮込まれている。スピラーレはスープがよく絡んでおり、表面にはパルミジャーノチーズが振りかけられている。

イワン  
「熱いので、気を付けてお召し上がりください」  
安房、スプーンを手に取り、ミネストローネを一口分掬いとる。それだけでもスプーンの上には細かな何種類もの具材が乗って、豊かないるどりが目を引く。

安房、湯気を散らすように何度か吹いて冷まし、スプーンを口へ運ぶ。

安房  
「……、うま……」

安房、ゆっくりと咀嚼し、飲み込んでからつぶやく。

安房 「煮崩れているわけではないのに、全部が溶けあ  
ってスープになって……」

イワン、静かにうなづく。

安房 「スプーンに乗らなかったはずの野菜や肉のうま  
みが、スープに全部乗ってる」

イワン 「野菜は、煮込むと甘みや旨味が増すケド……い  
くつか組み合わせることで、より強く旨味を引き  
出すことができるんだ。肉やチーズが合わさる  
と、それはもっと際立つ」

イワン、数秒の間安房の目をじっと見て、かすかに笑う。

イワン 「素材ひとつでは、出せない味だよ。よく味わっ  
て、楽しんで」

10.

Crocodylus lunam comedere 厨房(昼)

ルーナ

「イワンくん……安房せんせい、大丈夫？」

ルーナ、イワンのエプロンをつかんで不安げに見上げる。

イワン、ルーナに視線を落として小さく首を傾げる。

イワン 「それは、彼次第だよ。……手を離すのも、持ち  
続けるのも、決めるのは……本人だから」

イワン、静かに目を伏せる。手元のソースをくるりとかき混ぜ、オーブンのふたを開ける。オーブンクリップで天板を引き出し、チキンの焼き色を見て目の端を緩める。

イワン

「……うん、いいね」

安房、ミネストローネの最後の一口をスプーンに乗せてじつと見ている。

イワン、皿を手に厨房から出てきて、首を傾げる。

「……苦手なものでも、入っていたかな」

「えっ、いえ！ ……食べきってしまうのが、惜しくて」

イワン、眉を下げて笑う。

「そこまで気に入っていただけで、光栄です。…メインがまだなんだけど、お腹に余裕はあるかな」

「はい」

安房、スプーンを口に運ぶ。程よく冷めたミネストローネをじっくりと味わい、スプーンを置いたところで、ルーナが厨房から出てくる。

「お皿、お下げします」

「ありがとうございます」

ルーナ、安房に目配せ。安房も笑顔を返す。

イワン、二人の様子を見てぱちぱちと瞬きをする。

「……？」

ルーナ、足取りを弾ませて厨房へ戻る。

安房、首を傾げたイワンに照れ笑いをして居住まいをたがだす。

イワン、怪訝そうな顔をするが、すまし顔を作って皿を安房の前に置く。

イワン

「グリルチキン、レモンと野菜のソースで。……  
こちらはどうぞ、冷めないうちに」

安房

「いただきます」

安房、ナイフとフォークを手に取り、グリルチキンを一口大に切り取る。ナイフを入れた途端にパリ、と音を立てる焼けた皮目、あふれ出す肉汁に頬を緩ませ、細かくみじん切りにされた野菜のソースを肉に載せて口に運ぶと、目を輝かせる。

安房

「ん……!!」

イワン、安房の反応に口元へ手を添えてふ、と息をつく。

イワン

「お気に召していただけたようで」

安房

「……僕がこれまで食べてきたのは、鶏肉じゃなかった……?」

安房、半ば呆然として皿の上のグリルチキンを見つめる。

イワン

「疑うのは、過去のほうなのかい?」

イワン、笑いをこらえながら軽く問う。

安房

「煮込みならともかく、グリルでこんなにならわかい鶏肉、食べたことないです。ふわふわで溶けるみたいに柔らかいのに、皮はパリパリだし、野菜の歯ざわりがよくて……さっぱりしていて、でも肉汁も脂もたっぷり」

安房、目をキラキラさせて語る。ほとんどグルメリポーターと変わらない勢いでしゃべってからはたとイワンを見上げる。

安房

「……すみません、うるさくしてしまっ」

イワン

「いや、具体的な感想が聞けるのは嬉しいことだし……シェフとしても、こんなに美味しそうに食べてもらえたら、作り甲斐があるよ」

イワン、緩やかに尻尾を動かして胸に手を当てる。

イワン

「お客様に喜んでいただける料理を提供できて、シェフとして嬉しい限りです。どうぞご堪能ください」

イワン、一礼してゆっくり厨房へ戻る。

安房

「……次の一口が、こんなに楽しみだったこと、ないな……」

安房、感嘆のため息をついて、改めてチキンにナイフを入れる。口元には笑みがこぼれている。

12.

Crocodylus lunam comedere 厨房(昼)

イワン、業務用冷蔵庫を前に腕を組んで考え込んでいる。

ルーナ、ピッチャーを持って店内から厨房へ戻ってくる。

「イワンくん、せんせいもう少しで食べ終わりそうだよ」

「ああ……」

イワン、顎に手を当て冷蔵庫を見たまま返事をする。

「まだなにか、ひとつ……」

「さっき作ったソースはちがうの？」

「いや、……よし、これにしよう」

イワン

ルーナ

イワン

イワン

ルーナ

イワン、腕組みを解いて冷蔵庫の扉に手をかける。

ルーナ、笑顔で安房の手元から空の皿を回収。嬉しそうにお辞儀をして厨房へ戻る。  
イワン、ルーナと入れ替わりで皿を持って厨房から出てくる。

イワン  
「お待たせしました。本日のドルチェは、パンナコッタ、ベリーソースを添えて」

安房、置かれた皿を見てふわりと表情をほころばせる。皿には真っ白なパンナコッタにスライスされたイチゴの赤が映えている。パンナコッタにかけられた透明で赤いソースと、細く線を描くように皿の上に飾り付けられた暗い赤紫色をしたソースが、パンナコッタの白さを際立たせている。

安房  
「綺麗だ……」

イワン  
「お褒めにあずかり、光栄です」

イワン、表情を和らげて一礼。

イワン  
「お腹はいっぱいになりそうかな」

安房  
「どれもおいしくて、いくらでも食べられそうだけれど……デザートでちょうどお腹いっぱいです」

イワン  
「（柔らかない声で）それはなにより」

イワン、すっかり顔色が良くなっている安房を見て淡く笑う。

イワン  
「食後は、コーヒーと紅茶どちらをお持ちしましょうか」

安房  
「コーヒーを。……いただきます」

安房、デザートスプーンを手取る。スプーンが抵抗なくするりと沈み込み、パンナコッタを切り分ける。

「……！」

イワン、安房の反応を見て口元に手をやる。

安房、予想外の柔らかさに戸惑いながらパンナコッタを掬い上げ、ソースとともに口へ運ぶ。

安房 「……溶けた……これ、ソースはイチゴと……？  
(小さく首を傾げる)」

イワン 「カシスのソースです」

安房 「なるほど、ブルーベリーとも違うと思ったけど、カシス……」

イワン 「リキュールなどでご存じの方も多いかと」

安房 「確かに、カシスオレンジとがありますもんね」

安房、新たに一口パンナコッタを掬い取り、イチゴと一緒に口へ運ぶ。

イワン、目を細めながらゆっくり食べ進める安房に一礼して厨房へ戻る。

安房 「……胃袋が二つあったら、全部おかわりしていたな……」

安房、スプーンでソースを寄せたりしつつ、口に入れた先から溶けていくパンナコッタを味わう。スプーンを止めることなく食べ進めて、最後の一口を飲み込むと、ひとつ息をつく。

イワン、コーヒーカップとシュガーポット、ミルクピッチャーを載せたトレイを持って厨房から出てくる。

イワン 「食後のコーヒーをお持ちしました。ミルクと砂糖は好みでどうぞ」

安房

「ありがとうございます。……本当に、全部が美味しくて……こんなに味わって食事をしたのは久しぶりです」

イワン

イワン、コーヒーカップを安房の前に置く。  
「それはなにより。……美味しいものを食べて、ぐっすり寝ることができれば、人生は豊かなものになるよ」

安房

安房、コーヒーの香りを吸い込んで苦く笑う。  
「……そう考えると、僕はどちらもできていなかったなあ……」

イワン、小さく肩をすくめる。ゆったりと歩いて安房の向かいの椅子を引き、腰かける。

ルーナ、厨房から出てくる。にっこりと安房に会釈して、先ほどイワンが持ってきたトレーにパンナコッタの皿を載せて厨房へ戻る。

イワン

「……どちらも、簡単なようだけど。とても難しいことだからね」

安房

「豊かだからそれができる、のかもしれないですね」

イワン

「ああ……そうとも、言えるかもしれないね」

安房、コーヒーカップに角砂糖一つとたっぷりのミルクを入れてかき混ぜる。

イワン、安房の様子を見て柔らかに切り出す。

「来たときよりも、随分顔色が明るくなったみたいだ。……才能の話だけど、選べそうかい？」

イワン

安房、コーヒーを一口飲んでうつむき、それからゆるゆると首を横に振る。

安房

「（リラックスした声で）……僕には、どれかだけを選ぶことは、できないみたいです」

安房、イワンと視線を合わせて言葉を選びながら話す。

安房

「……色をね、褒められるんです。僕の文を読むと、想像できる光景が鮮やかで綺麗な、と。それはきつと、僕が絵描きでもあるからで……絵を描くと、そこにストーリーを読み取ってくれる人も多い。何をして、僕が経験してきたいろいろな『創作活動』の味が混ざっているんだと、思います。それはきつと、誰にでもできることではなくて……これから、僕がいくらでも幅を広げていくことができる、持ち味なんだろうと、思いました」

イワン、うなずいて続きを促す。

安房

「どれかだけ、を選んでその一つに専念する僕を、どのジャンルでも想像することができなかった。それが答えなんだと思います。……僕は、あれもこれも好きで、捨てることができないから、全部持つて歩き続けるしかない」

安房、仕方がない、というように眉を下げて笑う。

イワン、ほんのりと笑ってうなずく。

イワン

「……キミは、きつと周りの人の期待に応えることも好きなんだろう」

安房、気恥ずかしげに笑ってうなずく。

イワン

「もう少し、自分勝手になってもいいんじゃないかな。……キミも、自分で言っていただろう。時間には有限だ。全部を同時にはできない、って」

安房

「はい」

イワン

「だから、キミがそのときやりたいことを、やりたいだけやればいい。……時々、この店に美味しいものを食べにくる余裕がある程度に」

イワン、片眉を上げて悪戯っぽく笑う。

安房、ぱちぱちと瞬きをしてからふきだす。

安房

「いいんですか」

イワン

「チケットは、サインをいただくまでは……ここで食事ができる券だよ。持って歩いていたら、この店につくから」

安房

「本当に、不思議なお店だ」

安房、くすくすと笑ってコーヒーを飲み、目を伏せる。

安房

「ここへ来るまでは、全部に疲れてしまっ、もう全部投げたと思っ、たのに」

イワン

「そうかい？ オレは、キミが……きつと、全部持ったまま、この店を後にするだろうと思っ、たよ」

安房

「ええ？」

イワン

「捨てるつもりの方は、どれか一つだっ、残したとは言わないんだ」

安房、納得いったようにため息をついて、困ったようにイワンを見る。

安房

「……全部お見通しだったわけだ」

イワン、横に視線を流して肩をすくめる。

安房、イワンのわざとらしくとぼけた様子にまた笑って、コーヒーを飲み切る。

安房

「ごちそうさまでした。……帰ったら、やってみたいが増えましたよ。マネージャーさんに相談したいこともたくさんある」

イワン  
「キミが、前を向けたのならよかった。……お見  
送りますよ」

安房とイワン、席を立つ。

ルーナ、厨房からクロークへ向かい、安房のカバ  
ンを持ってくる。

安房  
「（一瞬声を詰まらせて）ありがとう、ルーナち  
ゃん」

ルーナ  
「（違和感を持った様子はなく）どういたしまし  
て」

安房  
「……僕はまた、絵も文も自分でかいた本を出す  
よ」

ルーナ  
「ほんと!？」

安房  
「もちろん」

イワン、扉の前で声を弾ませる二人を見て微笑  
む。安房が身支度を整える間にドアを開け、店の  
外へ招く。ドアの先、壁と屋根の向こうは午後の  
日差しに照らされている。

14.

Crocodylus lunam comedere 外観（昼）

イワン  
「本日は、ご来店ありがとうございます。また  
のお越しを、お待ちしております」

ルーナ  
「おまちしております！」

イワン、ルーナ、並んでお辞儀をする。

安房、お辞儀を返して笑う。

安房  
「こんなにお腹も心も満たされたのは、本当に久  
しぶりです。……ごちそうさまでした。きつとま  
た来ます」

安房、二人に背を向けて歩き出す。足取りは来店時よりも格段に軽く、駆けだしそうになっている。

イワン、ルーナ、安房の背が見えなくなるまで見送り、店内に戻る。

15.

Crocodylus lunam comedere 店内(夕)

ルーナ、洗い終わった皿を拭いている。

イワン、ルーナが拭いた皿を食器棚に戻している。

「……安房せんせい、飲み込んであげなくて大丈夫だったの？」

「おや。キミはてつきり、飲み込まないでほしいものだと思っていたけど」

「それはそうよ、ファンだもの。でも……あれは、飲み込んだほうがいい『歪み』だったんじゃないか、と違って」

ルーナ、皿を拭いていた手を止めてうつむく。

イワン、拭き終わった皿はすべて食器棚に戻し終えて、腕を組む。

「……確かに、あれは『歪み』だよ。きっと、なかったものを『ある』ことにした……いつだかはわからないけど、悪魔にそれを願ったんだろう」

※※※

(フラッシュユ)

悪魔(10)のシルエットが踊るように画面を横切る。

※※※

イワン

「……でも、彼は。『歪み』を、自分の一部として、取り込んで生きる強さを持っている。だから、オレの『口』は必要ない」

ルーナ、皿からイワンに視線を移し、じつとりと顔を見上げる。

ルーナ

「……そんなんだから、メランに『狩りが下手』とか言われるんじゃない？」

イワン

「……」

イワン、無言でルーナの手から皿を取り上げて食器棚へ戻す。

イワン

「アイツは、見境がないだけだろ」

-----Crocodilus lunam comedere episode-01『選択』 了